

## 墓が語る古の徳島

遺跡から発見される過去の人の痕跡のひとつとして、墓があります。人は誰もいずれ死を迎え、所属する社会の成員の手によって、墓に葬られることとなります。墓には、葬られた人自身と、彼ら彼女らが属した集団の構成員が認めていた社会的アイデンティティ、すなわち年齢・性・身分・出自などの情報が投影されます。こうしたことを利用して、考古学では墓を過去の社会や文化を復元する材料とするわけです。

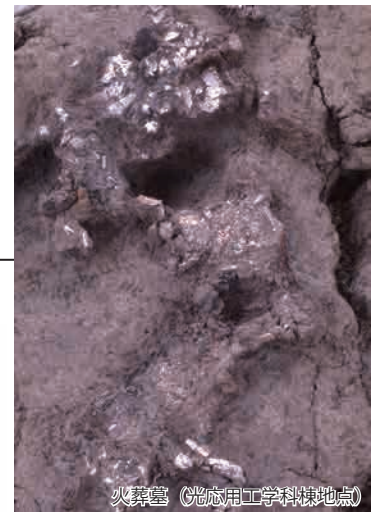
徳島大学埋蔵文化財調査室では、これまで大学構内遺跡で、弥生時代・古代・近世の墓を調査しています。また今年になって、幸運にも徳島県内の古墳などから出土した古人骨を所蔵することとなりました。そこで今回は、これらの資料が物語る、いにしへの徳島の様子を皆様にお届けします。  
(端野晋平)



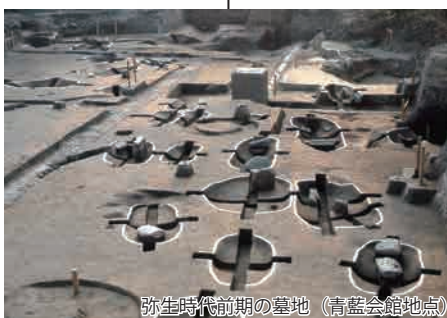
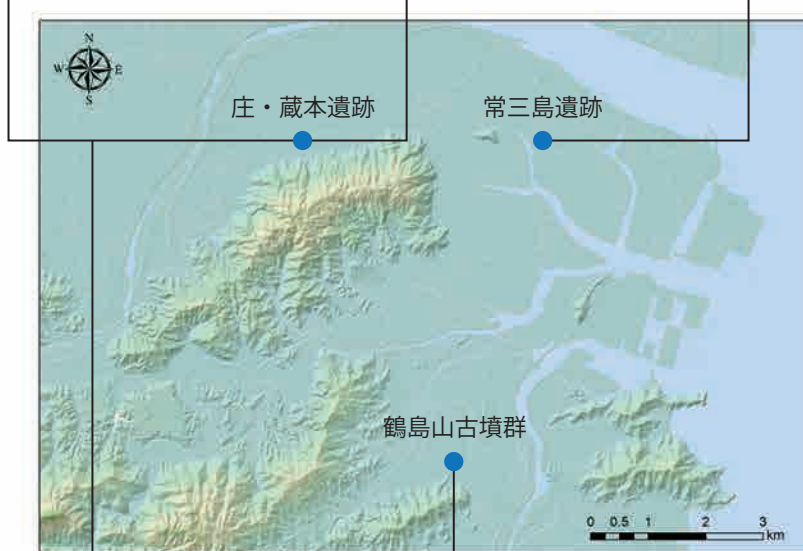
土器棺墓 (立体駐車場地点)



方形周溝墓 (立体駐車場地点)



火葬墓 (応用工学部棟地点)



弥生時代前期の墓地 (青藍会館地点)



2・3号石棺出土人骨頭蓋

今回取り上げる遺跡の位置

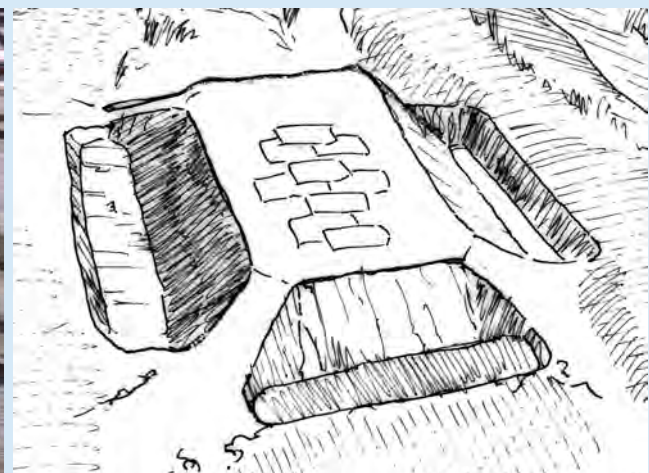
## 稲作とともに伝わった多様な墓制

朝鮮半島から北部九州にまず伝わった稲作とそれに関わる文化は、そこで在来の縄文文化と融合し、弥生文化が成立します。それからさほど時をおかず、弥生文化は稲作とともに、西日本各地へと広がることとなります。庄・蔵本遺跡では、こうしたことを背景に当地に伝わった弥生時代前期の墓が、列をなした状態でみつかっています。石棺墓と配石墓、土壙墓は、墓壙の形や石の配置からみて、内部に木棺が納められていた可能性があります。土器棺墓は、棺に使われた土器のサイズや人骨が遺存した他の遺跡での事例からみて、乳幼児用であったと考えられます。こうした墓のあいだに、副葬品や規模において大きな差を読み取ることができません。当時は貧富の格差のない平等な社会であったのでしょう。



## 選ばれた人びとの眠るメモリアルー方形周溝墓ー

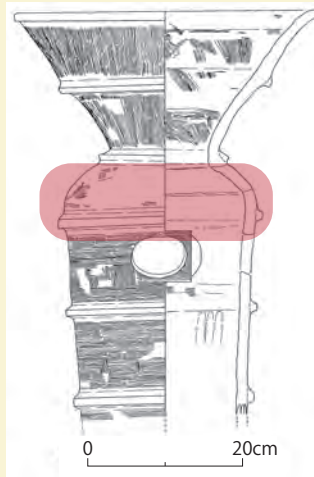
弥生時代中期以降、列島の社会は稲作を主たる生業基盤としつつ、複雑化・階層化が進行します。庄・蔵本遺跡でも、そのことを物語る弥生時代中期の方形周溝墓が発見されています。東病棟地点で発掘されたそれは、周溝の内側部分が後世の削平を受けていましたが、本来はここに墳丘が存在したと推定されます。墳丘の規模は10×7m程度で、中心部からは埋葬施設19基が検出されています。人骨や副葬品は出土していませんが、ここに葬られた人びとは、何らかの社会的な理由によって、一般成員の中から選ばれた人たちであったと考えられます。また、埋葬施設の長軸を南北方向にそろえている点や、互いに一部を重複させている点などは、この墳丘に葬られた人びとのあいだの社会関係を復元するための貴重な手がかりとなります。



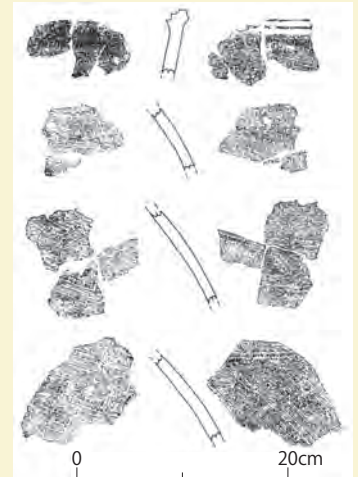
(徳島大学埋蔵文化財調査委員会・徳島大学埋蔵文化財調査室編  
1997『徳島市庄・蔵本遺跡95年度発掘調査概要報告書』より)

## 徳島大学構内に古墳は存在したのか？

古墳時代になると、列島社会は古代国家へと一歩寄り、前方後円墳をはじめとする巨大な古墳を築造するようになります。古墳は、そこに投じられた労働力の大きさから、当時の支配者層への権力集中を読み取ることができます。庄・蔵本遺跡では、溝から土器とともに、古墳時代中期の埴輪の破片が発見されています。これは古墳の埴丘上に並べられたと考えられるもので、その形から朝顔形埴輪と呼ばれています。徳島県内では、徳島市渋野丸山古墳(前方後円墳・118m)などでも出土しています。また、庄・蔵本遺跡の別地点では、古墳の副葬品とみられる玉類や石製紡錘車が出土しています。本遺跡では、古墳自体は見つかっていませんが、付近にかつて存在したか、あるいは未発見の古墳が存在する可能性があります。



渋野丸山古墳出土の朝顔形埴輪  
(徳島市教育委員会 2006『渋野丸山古墳発掘調査報告書』より)



庄・蔵本遺跡(医療技術短期大学校舎増築地点)出土の朝顔形埴輪片  
(徳島大学埋蔵文化財調査室 1998『庄・蔵本遺跡1』より)



庄・蔵本遺跡(立体駐車場地点)出土の玉類と紡錘車

## 古墳から出土した朱の付いた人骨

吉野川の南岸に位置する鶴島山古墳群では、開発に伴う発掘調査で、箱形石棺8基、石蓋土壙墓1基、竪穴式石室1基が発見されています。石棺の材料には、徳島のランドマークである眉山で採取できる緑色片岩が用いられていました。いくつかの石棺からは人骨が出土しましたが、そのうち2号石棺では、被葬者(壮年・男性)の頭部から胸部、上肢部にかけて、多量の水銀朱が検出されました。葬儀に際して、呪術的な意味を込めたものでしょうか。これらの石棺墓群は、徳島県内のほかの事例との対比によって、古墳時代中期に位置づけられています。現在、出土した人骨は、徳島大学埋蔵文化財調査室に保管されています。



1. 鶴島山古墳群の遠景
2. 2号石棺
3. 2号石棺出土人骨頭蓋

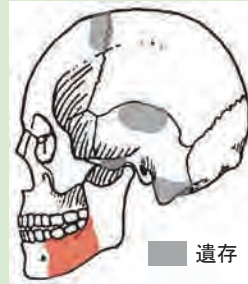
(1・2は(財)元興寺文化財研究所考古学研究室 1979『徳島市鶴島山古墳群の調査』より)

## 武家屋敷跡で見つかった火葬墓の謎

常三島遺跡では、近世徳島藩の武家屋敷地から火葬墓（17世紀代）が発見されています。焼けた人骨（成年前半・男性）とともに、木棺の釘や木片、多量の焼土と炭化物が出土しました。遺体を納めた木棺を、あらかじめ掘っておいた穴に入れ、薪などに火をつけて燃やしたものと推定されます。また、人骨の出土状況からみて、遺体は北枕で顔を西に向けた、仏教でいう「頭北面西」の姿勢で葬られたとみられます。こうした火葬習俗は、時代をさかのぼった室町時代にみられるものと似ています。屋敷地内に埋葬するのは、通常の武家の葬送習俗とは異なり、極めて特異といえます。何らかの特別な事情があって、亡くなった人を近隣の墓地には埋葬できず、屋敷地に埋葬したのでしょうか。



常三島遺跡（光応用工学科棟地点）出土の火葬墓



遺存した人骨の一部  
硬質で白色化していることから、600°以上の高温で焼かれたものとみられます。

## 出張講義を実施しました！

今年、徳島県内の小学校6年生を対象に、出張講義を募集しました。その結果、5校から依頼があり、「庄・蔵本遺跡で知る弥生時代」、あるいは「江戸時代の徳島藩武家屋敷跡」という内容で7件実施しました。生徒の皆さんには、徳島大学構内遺跡から出土した遺物を実際に、見て触って感じてもらいました。私たちも彼らの笑顔から元気をもらいました。



\*写真は三好市立政友小学校で実施したときのものです。

## 編集後記

今回は、墓を素材として、そこから過去の人びとの何が読み取れるのかをご紹介します。今年、徳島大学医学部顕微解剖学分野、奈良県立医科大学より寄贈された古人骨資料をさっそく活用しました。今後も、こうした資料を研究・教育・社会貢献の場で活用していきますので、どうぞご期待ください。（端野）

編集発行：徳島大学埋蔵文化財調査室

2016年12月31日 発行

〒770-8503 徳島県徳島市蔵本町2-50-1 TEL・FAX 088-633-7236

ホームページ <http://tokudaimaibun.jp/>

